

スウェーデン・ストックホルムの多文化共生地域、フィッチャで開かれた『芸術と建築の新ビエンナーレ』という特別な文脈の中で、家を建造する時や入居する時に既存の環境や社会との関係において執り行われる儀式や伝統を扱った。

アイデンティティ 帰属性意識と儀式とともに移住すること

移民として暮らす中、自分の継承したものを保つために日本の伝統を守り、社会に馴染むために現地の慣習を取り入れる、その均衡を探ってきている。度重なる引越しを経て、新居となる空間を浄め、神や霊といったそこに自生のものに空間の共有を頼み、そして何かを植えるという、新しい生活を始めるための自分なりの儀式を作り上げてきている。

浄化と調和

ストックホルム近郊の多文化の共生するとして知られるフィッチャのビエンナーレ会場にはコンテナが設置された。コンテナの中にはビエンナーレ参加作家であるAmanda EicherとAydin Ayhanによる共同キッチンが、コンテナ横にはKultivatorによるエコトイレの試作品が作られた。私は参加した芸術家や建築家たち、そして地元に住民たち、それぞれの「伝統」を参照して新たな儀式を構成した。ビエンナーレのオープニングとして、新たな空間を生み出し、浄め、守るために、そして隣人たちや環境とのつながりを築くことを祈念して、その儀式を行った。儀式ではプロジェクトに関わる人々それぞれの背景にある文化を反映した食べ物や飲み物を捧げものとし、儀式の後には観客に振る舞った。

入居時の慣例において、スウェーデン、スリランカ、日本に、粥という共通点が見られた(スウェーデンでは近隣の者が入居者に粥を振る舞い、スリランカでは入居すると鍋から吹きこぼれるように粥を吹き、日本では引越しそばの慣習が生まれる以前は、代わりに粥が用いられていた)。この三つの慣習を混ぜ合わせ、上記の浄化の儀式後には米粥を炊き、観客と共に食した。

根付くためと社会的な生活のための植樹

さまざまな背景を持つ地元の若者が構成される芸術グループに、彼らのアイデンティティを反映する樹木を選び、ビエンナーレ会場に植樹することを提案。彼らの提案とスウェーデン国立植物園の助言を踏まえ、胡桃の木が植えられることになった。そこにはこの地に人々が根付き、大きく育ち、地域社会に交流の場を与えるようにとの願いが込められている。



(left page) I am making a prayer (right page, from top to bottom) I am purifying the space with the new composed ritual in front of the public; both the collaborators and the public were curious and documenting the ceremony; the offerings for the ritual, representing the locality as well as the background cultures of the creators involved in the project; making rice porridge is the fusion of the rituals from Amanda Eicher, Jelena Rundqvist and the artist



共生の儀式 Convivial Ceremony

2014

プロジェクト (儀式構成・執行、共有、植樹)

協力: Amanda Eicher, Jelena Rundqvist (儀式構成)、Dream Team(植樹)

スウェーデン・フィッチャ 芸術と建築の新ビエンナーレ

